

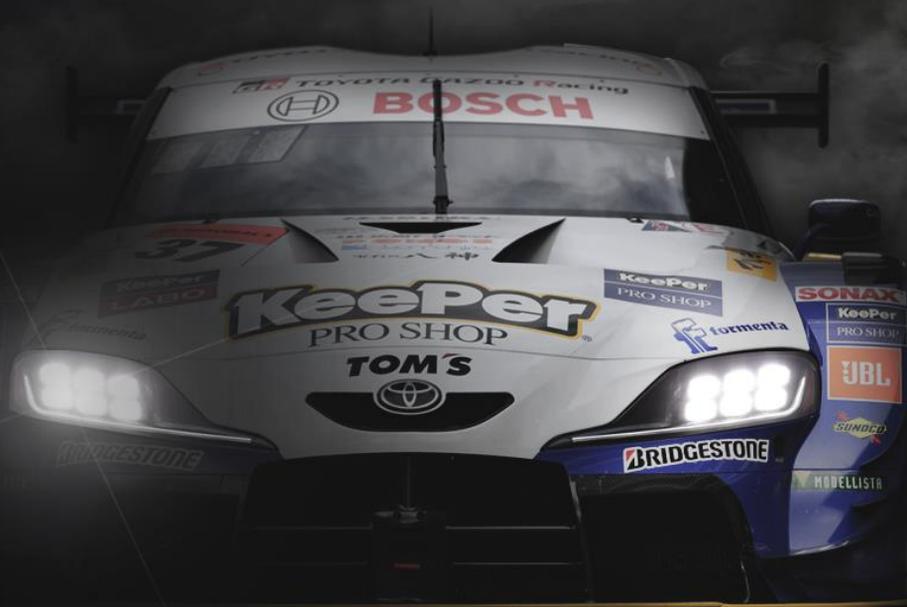


AUTOBACS SUPER GT 2020 SERIES

RACE REPORT

**KeepPer**

TEAM  
**TOM'S**



Rd.8 @FUJI SPEEDWAY

天候：晴れ時々曇り/ 気温：13-12℃ / 路面温度：17-16℃

ポイントランキングトップタイでTGR TEAM KeePer TOM'S37号車は、最終戦の富士スピードウェイに乗り込んだ。11月下旬に最終戦が富士で行われたことが過去に無く、気温と路面温度が低いコンディション下でまず練習走行がスタートした。この時期のコンディションを予測し万全の準備を整えて来た37号車はトップタイムをマーク。そして、その後に行われた予選においても常にトップタイムを記録。ニック・キャッシュに代わって前戦からステアリングを握る山下健太がQ2で従来のコースレコードを更新してポールポジションを獲得。ポールポジションポイント1点を獲得し、平川亮はランキング単独トップでチャンピオン決定戦に臨むこととなった。



- 平川 亮がQ1を担当した。
- 練習走行の勢いをそのままに快走。僅差で迫って来たチームメイトの36号車を抑えてQ1をトップ通過。
- この時期としてはやや硬めのタイヤをチョイスしているため、平川は十分にタイヤを温めて6周目にトップタイムをマークした。
- Q2を担当した山下も平川と同じく6周目にトップタイムを叩き出す予定で周回した。
- 低い路面温度の状況の中で、どれだけタイムをマークできるのか定かではなかったが、山下は唯一コースレコードタイムを更新することに成功。チームにとっては開幕戦富士以来のポールポジション獲得となった。



Driver	Q1	Q2
平川 亮	P1 1'26.722	—
山下 健太	—	P1 1'26.386

晴れ時々曇り/ 気温 : 13-12℃ / 路面温度 : 17-16℃



37 / ドライバー

平川 亮

ヤマケンがQ1は自信がないと言うので、僕がQ1をやることにしました。トップタイムを出せるかどうかかわらなかつたですけど、思いがけずにトップでQ2に進出することができました。練習走行で今回試したいセッティングも全てチェックできて、タイヤがこの低温でちゃんと発動してくれば、タイムは出るであろうと思っていました。しかし走り出しの時点では、Q1を突破できるかどうかかわらなかつた。この時期に予選をするのは経験がなかつたですから、状況が全然読めませんでした。タイヤのチョイスにしても、このように路面温度が低いコンディションではソフト目が良いのではと思っていたのですが、それがダメですぐに、トレッド面がザクザクになってしまって、硬めのチョイスしかできなかつたです。結局、Q2でヤマケンがコースレコードを叩き出して、自信がないと言っていたのに、良いところを持っていかれましたよね。予選全体としては100点ですかね。ポールポジションをヤマケンが獲ってくれて、ポイントリーダーになりましたけれど、ポイント争いが本当に僅差ですから気を抜く事が全くできない。ここ2年悔しい思いをしてきたので、勝って、チャンピオンになって、笑ってシーズンを終えたいですね。



37 / ドライバー

山下 健太

前戦もてぎでQ1を突破できなくて、それが申し訳なくて、トラウマになってしまっていて、今回も<Q1行け>と言われたのですが、無理です無理ですって、平川選手にQ1をお願いしました。そうしたらQ1でトップタイムが出て、素晴らしいことではありますが、自分にとってはすごいプレッシャーになってしまって、すごく緊張しました。タイヤの温まりが良くないのではないかと思っていたし、この状態でタイムを出せるかどうか、本当に不安でした。走行していてもどれくらいのタイムが出せるのか、出るのか全然わからなかつたです。タイヤを上手く温めることができて、そうしたらトップだったし、コースレコードタイムも更新できたので良かったです。これはマシンが良くて、タイヤも良くて、それが路面コンディションに合った結果で、自分のドライビングが良かったわけではないと思います。平川選手のチャンピオン獲得のための1ポイントをプラスできて、まずはちゃんと仕事ができたかなと思っています。決勝でも引き続き、全力でサポートします。



37 / レースエンジニア

小枝 正樹

最後の最後までQ1のドライバーが決まらなかつたので、ドライバー間で決めてもらいました。練習走行から予選までの流れは、まずまず順調であったと思います。路面温度が低いコンディションにどう対応するべきかは事前に考えていました。持ち込みの状態は良かったかなと思いますが、アジャストを加えなくてはならない部分がありました。少なくともドタバタという見え方はなかつたと思うので順調であったというか、コンディションとセットアップの辻褄があったところですね。プリチストンさんが用意してくださったソフト目のタイヤは、かなりトレッド面が荒れてしまって、結果として硬めのチョイスとなりました。ウォームアップが重要になり、どれだけのタイムをマークする事ができるか手探り状態でした。ポールポジションを獲得できたのは、二人のドライバーの実力に負うところが大きい予選でした。ポールは獲れましたが明日のコンディションに対して合うかどうか。チャンピオンに向けて集中して、決勝のセットアップを直前のウォームアップセッションでチェックします。

晴れ時々曇り/ 気温 : 13-12℃ / 路面温度 : 17-16℃



37 / チーフエンジニア

東條 力

亮も健太も最高の仕事をしてくれたと思います。そして、この季節のコンディションに向けてグレイズできちんと準備してきた事が正しかったと証明されました。プリチストンさんが用意してくださったタイヤもマッチしていました。コースレコードを更新していますから、マシンのセットアップとタイヤのマッチングが最高だったという事です。37号車のタイヤチョイスも36号車のチョイスも今日のようなコンディションであれば同じくらいのパフォーマンスでした。決勝のコンディションは、今日よりも気温が下がるという予報なので、日差しが出て路面温度が上がらないと、やや硬めのタイヤチョイスですから、スタート直後は苦しいかもしれません。ピットインのタイミングも36号車とは異なる可能性もありますが、それはレースの展開次第ですね。勝利に向けて最高のポジションからスタートできるわけですから、そのまま勝ってチャンピオンを決めて欲しいですね。



37 / チーム監督

山田 淳

ドライバー2人が頑張った。そしてライバルたち、特にホンダさんがタイムを伸ばしてこなかったこともあって、ポールポジションが獲れたと判断しています。シーズンの終盤になって予選でのホンダさんのタイムアップはすごかったですからね。練習の段階から持ち込みの状況がまずまず良くて、順調に駒を進めて来ることができました。やるべきことはやって来たので、相手がタイムアップして来たら、それはそれでしょうがないかなと思っていました。あとはタイヤのチョイスが一番難しかった。ソフトとハードの選択は、本当に悩みましたね。今日の路面温度ではハード目の選択が少しだけ良かったという答えですが、これが明日のコンディションではどうなるかは、走って見ないと答えは出ない。ほんの少しの温度差でどちらのタイヤが良いのか、判断が分かれる状況でしたが、我々はハード目、36号車はソフト目という結果になりました。泣いても笑っても最終戦。チャンピオン獲得のために全力を尽くします。



37 / 総監督

舘 信秀

この時期にレースをしたこと無いわけで、どうなるかは誰も、どのチームも分からない中、ポールポジションを獲得。それもコースレコードを更新するタイムを叩き出したのだから素晴らしい。ドライバーの働きも良かったけれど、チームが最終戦に向けてちゃんと準備をして、それが正しかったということだ。できれば、36号車が2番手でフロントローを独占できたら格好良かったけれど、それは欲張りすぎるかな。1ポイントをもらって、単独のランキングトップ。この勢いでチャンピオンへ突き進んで行きたい。

天候：曇り・ドライ / 気温：8-8℃ / 路面温度：13-12℃

ポールポジションからTGR TEAM KeePer TOM'S37号車は、1周目に6番手ポジションからジャンプアップした23号車のGT-Rにトップの座を奪われたが、タイヤが温まった6周目に首位を奪還し、その後は後続との差がどんどん開いて行った。ピットインしてドライバー交代した後もその快走は続いた。しかし終盤に入って、100号車のNSX-GTに差を詰められてしまった。残り数周を残して燃料残量警告は示されたが、最後まで走り切れると判断して、100号車を抑えて最終ラップへ突入。最終コーナーを立ち上がってストレートに出たところで失速、フィニッシュラインまで約500mで100号車に先行を許してしまい、惰性でフィニッシュラインを通過し2位。平川亮は2ポイント差で3年連続してランキング2位となった。



- 山下健太がスタートドライバーを担当した。
- 当初2周を予定したフォーメーションラップは、隊列が整わなかったので3周となった。
- 1周目に23号車がスパートしてトップに立ったが、タイヤの温まりを待って6周目にトップを奪還。その後は2位以下を引き離す展開となった。
- 大差を築き、23周してピットイン、平川に交代して首位を維持したままレースに復帰した。
- 最大16秒の差を2位につけてフィニッシュを目指した。
- ゴールまで数周を残して燃料残量の警告が表示されたが、フィニッシュまでは走行可能と判断して、チームはそのままのペースで走行を続ける指示をした。
- 2位に上がって来た100号車に差を詰められる展開となったが最終盤で突き放して最終ラップに突入。トップで最終週の最終コーナーを立ち上がったところでガス欠状態となって失速。100号車にパスされ、2位でフィニッシュした。



Driver	Race Result	1s / Fastest Lap	2s / Fastest Lap
平川 亮	P2	—	1'29.541
山下 健太		1'29.009	—

天候：曇り/ 気温：8-8℃ / 路面温度：13-12℃



37 / ドライバー

平川 亮

最後まで走り切れると信じていたので、言葉がないですね。残り数周で燃料残量の警告が表示されたので、チームに連絡したところ、計算上はフィニッシュまでそのままのペースで問題ないと言われました。それを信じて走っていたのですが、最終コーナーを立ち上がった一気に入気状態になってしまって、惰性でフィニッシュラインへ向かうしかなかったです。100号車に抜かれて、チェッカーを受けた後にもう走れなくなってストレートでマシンを止めました。今年こそはチャンピオンを獲得したいと思っていただけに残念ですね。これで3年連続でランキング2位。ガス欠の原因は何だったのかを究明してもらいたいと思います。ギャップを築いてくれたヤマケンのパートは素晴らしかった。100点の走りだったと思います。



37 / ドライバー

山下 健太

レースのスタート直後は23号車が来るだろうと思っていたので、抜かれてもこっちのタイヤが温まれば抜き返せば良いと思っていました。フォーメーションラップが1周増えたことは、少しでも多く、タイヤを温めることができラッキーでした。23号車を抜いてからは後ろで36号車と39号車が競り合ってくれたのでギャップを広げることができました。その後もプッシュし続けて平川選手に繋ぐことができました。そこまでは良かったのですが、あんなことになるとは思っていませんでした。自分のパートはきっちりと走れたと思いますが本当に残念ですね。



37 / レースエンジニア

小枝 正樹

普段のレースでは起こらないことが起こってしまったのかなと思います。給油の量が少なかったわけでもないし、スタッフのミスも無かったし、ドライバーは最高の仕事をしてくれたのですから、勝てて当然だった。しかし、結局ガソリンが足りなくて失速した。こんなことが起こるかも知れないと事前に予測して、手立てを打っておけば良かったと悔やまれる部分もあるのは確かです。それは私の責任ですね。失速するまで全てが順調でした。タイヤのウォームアップもフォーメーションが3周になったおかげで良かったし、山下選手がギャップを築いてくれました。タイヤのパフォーマンスも良く、亮も安定したペースでゴールを目指していた。基本的には問題は無いはずでした。ランキング2位。残念です。

天候：曇り/ 気温：8-8℃ / 路面温度：13-12℃



37 / チーフエンジニア

東條 力

何の問題もなくフィニッシュして、チャンピオンを喜び合う予定でしたが、非常に残念な結果となりました。エンジンを担当してくれているTCDさんと、細かなチェックをずっとやり取りしていますから、何か問題があれば現象が出る前に変化があったはずですが、ガソリンが足りず失速してしまいました。健太がギャップを築いてくれて、100号車が迫って来ても大丈夫であると信じていましたが、ホンダさんの決勝でのペースは予想以上に速かったですね。何はともあれ、ガス欠を引き起こしたのはチームの責任であり、スポンサーやファンの皆様には大変申し訳なく、原因の究明と再発防止策を講じなければなりません。そしてチャンピオンを獲得した100号車の皆さんに敬意を表します。



37 / チーム監督

山田 淳

まさか止まってしまうとは思っていませんでした。全てが計画通りだったし、無理して攻めていたわけではないので、何かが食い違ってしまったのでしょう。それは今後をチェックしてみないと原因が明確になりません。終盤に100号車が迫って来ていたので、亮には出力を上げられるまで上げて最後まで走って行こうと指示しました。それでも我々の計算上では、タンクにガソリンが残った状態でフィニッシュできるはずでした。細かなチェックをしてみないと分かりませんが、これまでに経験したことのない低温の中でレースをして、それが悪い方に影響してしまったのかも知れないですね。一生懸命走ってくれた亮と健太には申し訳ないといしか言えないのですけれど、原因が分からないだけに、本当にどう言ったら良いのか、非常に複雑な気持ちです。チャンピオンになれなかった亮、優勝請負人とならずだった健太に本当に申し訳ないです。



37 / 総監督

舘 信秀

一体何が起こったのか。目の前で起こったことが何なのか信じられなかった。ドラマチックなエンディングとなって、観戦していた皆さんは喜んだかも知れないけれど、その敗者となった我々にとっては悔やんでも悔やみきれない。これで3年連続でランキング2位。でも過去の2年は戦って、その結果としてチャンピオンを獲得することができなかったけれど、今回はあと500mで失速して力なくフィニッシュラインを切るという結末だった。チーム全体が、何が起こったのか信じられなかった。歴史的な劇的な逆転劇は、モータースポーツの面白さとして語り継がれるのかな。でも悔しい。優勝してチャンピオンを獲得したTEAM KUNIMITSUの高橋国光さんと、チームの皆さんにおめでとうの言葉を贈る。そして、この厳しいコロナ禍の状況でレース開催を支えてくれた全ての皆さん、ファンの皆さんに感謝申し上げます。